

George MacDonald の *The Princess and Curdie* における Curdie の墮落と成長¹

田 中 優 子

Curdie's Degeneration and Maturation in George MacDonald's *The Princess and Curdie*

Yuko TANAKA

はじめに

George MacDonald (1824-1905) の *The Princess and Curdie* (1883) は、前作 *The Princess and the Goblin* (1872) から11年後に発表されているが、物語の中では前作から1年後の様子が描かれている。*The Princess and the Goblin* において、鉱山で働く少年カーディは、地下に住む邪悪な生物であるゴブリンたちによって王女アイリーンが誘拐されようとしていたところを救い出し、その結果ゴブリンたちも洪水で流されて姿を消したことから、国に平和をもたらした英雄的な存在であった。しかし、*The Princess and Curdie* の冒頭で描かれるカーディは、前作での活躍とは裏腹な、凡庸で想像力に欠けた、さらには虚栄心が強い人物である。彼は衝動的に白い鳩を射落し、その結果強い後悔の念に苛まれる経験をきっかけに、前作からアイリーンやカーディを導く女性として登場していた great-great-grandmother との再会を果たした後、改心へと向かっていく。物語はそこから、腐敗した町グウィンティストームにおいて再び英雄のように活躍するカーディの姿を描く。そして成長した王女アイリーンとカーディは結婚し、女王と王様としてグウィンティストームの町を“a better city” (319) にしていくが、彼らには子どもが生まれなかったことにより、彼らの死後、人々によって選ばれた新しい王の下で町は再び腐敗していくこととなる。そして物語は、町全体がついには崩壊して、その名前さえ忘れられることとなることを描いて終わる。

作品の大部分は、カーディがいかにグウィンティストームに蔓延る腐敗を暴き、王や王女を救い出すか、に割かれており、上記のようなカーディの墮落や結末の町の崩壊について、その理由が明確に示されることはない。また、Jason Marc Harris が “Princess Irene fades into the background [...] and Curdie takes center stage in his quest” (67) と述べているように、前作で主人公だったアイリーンの登場回数は減り、背景に回ってしまったかのように見えるため、彼女が議論の中心にあがることはほとんどない。しかし、この唐突で不可解な主人公の墮落や結末の町の荒廃は、作者 MacDonald の他の作品、例えば *Phantastes* (1858) において、自分の内面を見

1 本稿は日本イギリス児童文学会第44回研究大会（2014年11月30日）における口頭発表原稿を加筆修正したものである。

つめることができない主人公アノドスが、妖精の国で成長を遂げたかのようにみえるが、自己の負の部分の具現である影への恐怖を拭い去ることができない点や、*Lilith* (1895) において成長を遂げたと思われた主人公ヴェイン氏も、自らの悪事を悔い改めたと思われたリリスも、最終的な目覚め（神の国へと入ること）は得られていない点など、作品が追及していたと思われる主人公の成長がついには完成を迎えないという点と類似しており、作者の創作の主題と関連する重要な要素であると考えられる。また、登場回数は減るものの、作品タイトルにその名を残す王女アイリーンも、実際にはカーディの墮落およびそこから成長において、密接な関わりを持っている。従って、本稿では、唐突に起こるカーディの墮落及びそこから成長に、カーディとアイリーンの関係性がいかに関わっているかに着目し、常に精神的な墮落と隣り合わせの状態にある主人公にとって、善へと向かっていくために、その不完全さを補うものを得ることが必要であることを論じていく。

I. カーディの墮落：ゴブリンとの類似と無意識に犯す罪

前述の通り、作品冒頭でカーディは唐突に、そしておそらく彼自身も無意識なままに精神的に墮落していく。前作 *The Princess and the Goblin* と同様に今作においても、当時の英国社会で話題になっていた進化論の影響はしばしば見受けられるが、本来身体的な進化の問題である進化論も、作品中 great-great-grandmother が “Have you ever heard what philosophers say – that men were all animals once?” (96) と尋ねているように、作者 MacDonald にとっては「哲学者」が取り扱うべき、思想的で精神的な問題であることがわかる。前作では、もともと人間だったけれども精神的に「退化」していった生物としてゴブリンたちが登場したが、今作では、かつてそのゴブリンたちを退治したはずのカーディが、ゴブリンたちに類似していることが描かれている。

例えば、カーディの周りの鉱夫たちは、銀や銅等、地下に関することであれば理解するけれども、想像力を要する事柄については全く聞く耳を持たない人物として描かれているのだが、彼らと共に過ごすカーディの様子が次のように描かれている。

Still, he was becoming more and more a miner, and less and less a man of the upper world where the wind blew. On his way to and from the mine he took less and less notice of bees and butterflies, moths and dragon-flies, the flowers and the brooks and the clouds. (22, 下線は筆者による)

上記引用の下線部にあるように、ますます「上部の世界」の人間ではなく、ひとりの鉱夫になっていった、とされている点は、自ら地上から地下へと移動していったゴブリンたちと同様の変化を遂げているかのように見える²。また、カーディが白い鳩を射てしまう場面で、“With a gush of pride at his skill, and pleasure at his success” (24) と描かれるように、自らの弓矢の腕前に虚栄心の満足を得ている点は、前作における靴をはいたゴブリンの女王をはじめとして虚栄心に支配されたゴブリンたちと共通していると考えられる³。このように、アイリーンのためにゴブリンたちを退治した1年後に、カーディ自身がゴブリン化してしまっていることが示唆されている。前作において、カーディはゴブリンたちを執拗に攻撃し、それはあたかもカーディ自身の墮落への可能性を自ら抹殺しようとする試みのようでもあったのだが、今作ではその恐れ

ていたことが実際に起こってしまう結果となっている。

そして、カーディの墮落をさらに如実に表していると考えられるのが、白い鳩を射る場面である。彼は、弓矢を手に鉾山から家へ帰る途中、ある美しい白い鳩を目にする。後に great-great-grandmother の鳩であることがわかり、結果的に命を吹き返すこととなるこの鳩であるが、その何の落ち度もない生物を射落としてしまうというカーディの罪は、以下のように彼の心の動きと共に描かれている。

カーディはその美しい鳩に見とれるにつれて、“It was indeed a lovely being, and Curdie thought how happy it must be flitting through the air with a flash – a live bolt of light” (23) とあるように、鳩が命ある稲妻のように、光を放ちながら空を飛ぶ様子を想像し、その鳩に憧れのような感情を抱いているかのである。そしてそれは次の文において、自らと鳩との境界をなくし、その一体感を享受するまでに至っている。

For a moment he [Curdie] became so one with the bird that he seemed to feel both its bill and its feathers, as the one adjusted the other to fly again, and his heart swelled with the pleasure of its involuntary sympathy. (23-24, 下線は筆者による)

ここでカーディは上記引用の下線部に「彼の心」の「無意識」な「共鳴」とあるように、無意識に自己と鳩の境界線をなくしてしまっている。そしてこのように自己と同一視していた鳩をその直後に弓で射落としてしまう。

Another moment and it would have been aloft in the waves of rosy light – it was just bending its little legs to spring; that moment it fell on the path broken-winged and bleeding from Curdie’s cruel arrow. (24)

このカーディの衝動的ともいえる白い鳩への攻撃は、先に引用した “With a gush of pride at his skill, and pleasure at his success” (24) という文が示すように、彼自身の弓の腕前への自信と虚栄心の満足を得たいがための行動だったということもできるが、憧れの対象として見ていたものへの所有欲や支配欲を示すと同時に、自己と同一視していたものを自分で射落とすという自虐的な行為ともとれる。つまり、この自己矛盾が示すように、カーディは白い鳩と「無意識」に一体化していたと同様に、その鳩を無自覚に殺そうとしてしまっていたのである。

後に彼は great-great-grandmother に対して、このときのことを “I didn’t mean to do any harm, ma’am” (38) と弁明しているが、この不可解な行動について great-great-grandmother は次のように説明し、人間は意識しなくても罪を犯してしまうのだと述べる。

“You say you didn’t mean any harm: did you mean any good, Curdie?” [...] “Remember, then,

2 *The Princess and the Goblin* で描かれるゴブリンは、かつて地上に住んでおり、他の人々と変わりはないのだが、自ら好んで地下へと下りていったとされている (*The Princess and the Goblin*, 11-12)。

3 前作において、大多数のゴブリンが靴をはかないとされている中、唯一靴を履くのがゴブリンの女王であるが、その理由は前女王が靴を履いていたことから、彼女と張り合うためのものであったと述べられている (*The Princess and the Goblin*, 74)。

that whoever does not mean good is always in danger of harm.” (38)

彼女は良いことをしようとしないう限り、誰もが誰かを傷付ける危険性があるのだと述べている。つまりカーディは良いことをしようと思わなかったばかりに無自覚の内に罪を犯してしまった、ということである。彼はその後の great-great-grandmother との問答の中で、“I was doing the wrong of never wanting or trying to be better” (40) と認めるに至り、そのことは彼女が “I am so glad you shot my bird!” (41) と述べるほどに、great-great-grandmother を満足させるものであった。作品はこのように、意識しなければ不条理に罪を犯してしまうほどに人間が「善」や「良いもの」であり続けるのは不確定なことであり、精神的な墮落は無意識のうちに進んでしまうものであることを描いている。

カーディはこの白い鳩の一件を機に、再び王と民を救う英雄としての役割を担うことになるが、それでもなお、作品はカーディと、他の墮落したとおぼしき人物との共通点を描き続ける。王様とアイリーンが住む城の酒蔵やキッチンへ入った際、王様の家臣や小姓を目にするが、カーディは彼らと自分の外見上の共通点を二度認識する⁴。王様の召使たちについては、カーディに備わった、手を握ることで人物の真の姿を見抜く能力により、その内面が動物へと退化していることがわかるのだが、彼らと外見上とはいえ類似点を強調されている点は、彼らとカーディとの違いが紙一重であることを示唆しているのではないか。つまり、ここでは英雄として活躍するカーディも、結局は退化の可能性を失っていないということである。

II. アイリーンの愛情：カーディの変化の転換点

では、そのように「善」のままでい続けることが不確かである人間が成長へと向かうために、作品は何を描いているのか。Roderick McGillis が “MacDonald finds renewal of hope in the love of a woman” (160) と述べているように、MacDonald 作品では失われた希望を取り戻すために、女性の愛情が重要な役割を果たしている。本作品においても、カーディの母や great-great-grandmother が主人公や他の登場人物の進むべき道の指針となっているが、本節ではカーディの精神的な墮落およびそこから成長の、それぞれへ向かう最初の転換点において、アイリーンがいかに関わっているかに焦点をあてる。

物語は冒頭部分で、カーディの成長が “not in a very good way” (22) にあると述べており、その兆候のひとつとして、前作でアイリーンが話した great-great-grandmother の存在を再び疑い始めたことを挙げている。カーディは今作においてその姿を初めて実際に目にするが、前作では彼女を見ることはできていなかった。前作の終わりでは、アイリーンの話や great-great-grandmother の存在など、目に見えないものを信じようとしていたところだったにも拘わらず、このように変化してしまったカーディだが、作品はそれに続くカーディの変化の始まりを、アイリーンが去った直後に位置付けている。

4 まず、城の酒蔵において王の家臣たちをみかけると “He noted that their colours were the same with those he himself, as king’s miner, wore;” (176) と彼らの服の色と自分の服の色が似ていることに気づく。また、城の台所においても、小姓のひとりについて、“In another corner lay a page, and Curdie noted how like his dress was to his own.” (180) と外見上の類似に言及している。

A gloom fell upon the mountain and the miners when she [Irene] was gone, and Curdie did not whistle for a whole week. As for his verses, there was no occasion to make any now. He had made them only to drive away the goblins, and they were all gone – a good riddance – only the princess was gone too! He would rather have had thing as they were, except for the princess's sake. (16)

上記の引用にあるように、アイリーンが去った後は、陰鬱さが山にも鉱夫たちの間にも漂い、カーディは口笛を吹くことも詩をつくることも止めてしまった。詩を作ったり、歌を歌ったりする行為は、それらを嫌っていたゴブリンたちとカーディを決定的に区別するものであったはずだが、それを止めてしまったということは、先に述べたゴブリンへの類似の始まりを示す箇所であると考えられる。つまり、アイリーンの不在により詩歌の創作を中断したということは、カーディの想像的で創造的な側面のためには、アイリーンと一緒にいることが重要であるということを示唆している。その後カーディはアイリーンの話も、great-great-grandmother の存在も再び疑い始め、精神的な「退化」の道を辿ることから、アイリーンの不在がカーディに与えた道徳的・精神的な影響が大きいことがわかる。

また一方で、アイリーンはその不在にも拘わらず、彼女への追憶というかたちでカーディに変化をもたらしている。先に述べた白い鳩を射落とす場面において、カーディは自分が射落とした鳩を両手で抱えると、胸がいっぱいになっていくのを感じる。そして次のように、鳩の最期のときかと思われる瞬間において、アイリーンのことを思い出している。

Once more it [a white pigeon] opened its eyes – then closed them again, and its throbbing ceased. Curdie gave a sob: its last look reminded him of the princess – he did not know why. He remembered how hard he had labored to set her beyond danger; and yet what dangers she had had to encounter for his sake: they had been saviors to each other – and what had he done now? He had stopped saving, and had begun killing! (26, 下線は筆者による)

下線部にあるように、カーディは「理由もわからず」鳩の眼差しをみてアイリーンのことを思い出している。それを引き金に、彼とアイリーンがかつていかに危険と向き合い戦ったかを思い出し、当時と比べた今の自分の状況を悔いている。彼はこの後、great-great-grandmother が放ったと思われる光を目にし、全速力でそれを追いかけて彼女の部屋がある城の上部へと向かう。この時点で彼は great-great-grandmother の部屋の位置を特定できてはいなかったものの、“all he knew was that he must go up” (30) と書かれているように、城の内部を上へ上へと昇っていくこととなり、それは彼自身の内面の進化や向上と同調しているかのようである。自己と同一視した鳩を射た行為は、第一節で述べたように、善であり続けることの限界を示してもいたが、結果的にはカーディ自身の擬似的な死を暗示しており、彼はそこから擬似的な再生の道を辿ることになる。そして、カーディはまさに great-great-grandmother の部屋へとたどり着こうとする直前、以下のように階段を四つん這いで上る。

[...] there was a narrow stair – and so steep that, big lad as he was, he too, like the Princess Irene before him, found his hands needful for the climbing. (32)

引用にあるように、かつて王女アイリーンもこの場所にきた時同じように四つん這いになって上り、great-great-grandmother のところへ辿りついている。アイリーンの場合、繰り返される眠りと目覚めが彼女の擬似的死と再生を示していると考えられるのだが、その中でこの四つん這いになる行為は生まれ変わった後の人間の発達段階の前進を示すものであった。そして作品が敢えてその類似を叙述しているように、カーディの場合も、ようやく自力で進むことのできる赤子に戻ったかのようであり、彼自身の再生を体現する描写であると考えられる。以後、カーディの成長を直接示す出来事は great-great-grandmother との再会を果たし、忠告を受けることで改心を遂げることはあるのだが、そこへ至るきっかけを作ったのは、さかのばればアイリーンへの追憶であったのである。

作品の他の場面において、カーディは自分の母親や great-great-grandmother を思い出すことでも自分を正しく保ったり、勇気を出したりしている⁵。このように誰かを追憶することが人を精神的に正しい方向へ導く力を与えてくれるということを、作品は随所で描いている。そして、カーディが墮落から成長へと向かう転換点において登場するアイリーンは、その中でもカーディにとって特別な意味を持つと考えられる。カーディにとってのアイリーンは、その不在により自らの欠陥が助長されるものであり、またその存在により欠陥が補完されるものである。一人では善であり続けることが困難なカーディは、その欠陥を補う存在としてアイリーンを必要としているのである。

その後、カーディは宮殿でアイリーンと再会し、そこから結婚へと至るが、作品はそこに至るまでも度々お互いを思い合う様子を描く。そしてカーディだけでなく、アイリーンの側も、長く会わない期間があったにも拘わらず、カーディへの信頼の気持ちを持っていたことが次の場面からわかる。

グウィンティストームの町に到着し、王様の宮殿へと入ったカーディは、王様の部屋でアイリーンと再会する。二人はいまだにお互いを覚えていることを確認すると、アイリーンは彼に対して以下のように述べている。

“Then we know each other still,” she said, with a sad smile of pleasure. “You will help me.” (184, 下線は筆者による)

ここで、1年ぶりに突然現れたカーディに対して自信をもって「あなたは私を助けてくれるでしょう。」と述べていることは、アイリーンの彼に対するゆるぎない信頼の表れであると考えられる。カーディがアイリーンを思い出して退化の道から抜け出したように、いま家臣の策略によって王様が病気になるという辛い状況にあるアイリーンは、カーディの出現に希望の光を見出したかのように見える。

以上のように描かれるカーディとアイリーンの間の愛情は、作者 MacDonald と妻との結び付きとも類似している。彼は妻へと当てた手紙の中で、次のように述べている。

5 例えばカーディは城の酒蔵において、食べ終わったパイのお皿を骨と一緒に水の中へ捨ててしまおうかと思ったが、“but he thought of his mother, and hid it instead” (177) とあるように、母のことを思い出し、お皿を粗末に扱うことを避けた。また、別の場面で、王の部屋にひとりであることを恐ろしく思ったが、“To gain courage he had to remind himself of the beautiful princess who had sent him (183)” とあるように、great-great-grandmother を思い出すことで勇気を出している。

[...] , shall it not still shine when the cloud is over my head? I may see the light shining from your face, and when darkness is around you, you may see the lights on mine, and thus, we shall take courage. (Sadler, 26)

このように、作者は自身と妻の間の愛情を、暗闇における光であり苦難の際に勇気を与えるものであると見做しており、それはカーディとアイリーンがお互いの存在によって善でありつづけたり、希望を見出だしたりしている点に表れていると考えられる。さらに、同じ手紙では、次のように述べ、その愛情は神への信仰と結び付けられている。

You and I love: but who creates love? Let us ask him to purify our love to make it stronger and more real and more self-denying. I want to love you for ever – so that, though there is not marrying or giving in marriage in heaven, we may see each other there as the best beloved. (Sadler, 26)

ここで、男女の愛情は神によって作られたものであり、現世での愛情が深ければ神の国においてもそれが続いていく、と述べられている。すなわち、愛情は神が意図して造られたものであるからこそ、ゆるぎない愛情をお互いに抱くカーディとアイリーンは、神の領域にも近づくような、精神的な高みを目指すことができるという表明なのではないだろうか。

おわりに

本稿では、カーディの墮落およびそこから成長にアイリーンが関わりをもっていることを確認し、作品は、精神的に退化していく可能性を常に持ちつつも、その欠陥を補うものとして、ゆるぎない愛情を得ることで、その愛情に助けられて善へと向かう人間の姿を提示していることを考察した。

人間の成長について、作品はそれが“continuous dying” (22) か“continuous resurrection” (22) であると述べているように、常に流動しているものであると捉えている。成長が常に流動的であるということは、当人が“resurrection”の道を選ぶ限り、荒廃や退化でさえもその後の成長への第一歩であるという希望になるということではないだろうか。カーディが救い出したグウィンティストームの町が彼らの死後荒廃していく様子は、結局のところ人間の成長の永続性に対する諦念を示すこととなるが、だからこそ逆に、墮落から逃れることを促してくれる愛情とは貴重であることを示してもいる。文学作品においては、ともすれば不確実な、あるいは問題を引き起こすものとして描かれることも多い男女の愛情だが、MacDonald が描くそれは、人間を精神的な高みへと押し上げてくれる崇高なものであり、罪と紙一重である善が身をゆだねるべき、確かなもの、であるのだ。

参考文献

Bleecker, Timothy Jonathon. *The Christian Romanticism of George MacDonald: A Study of his Thought and Fiction*. UMI, 1990.

- Creed, Daniel. "Connecting Dimensions: Direction, Location, and Form in the Fantasies of George MacDonald" *North Wind: A Journal of George MacDonald Studies*, vol. 33, 2014, pp. 1-20.
- Harris, Jason Marc. *Folklore and the Fantastic in Nineteenth-Century British Fiction*. Ashgate, 2008.
- Hein, Rolland. *George MacDonald: Victorian Mythmaker*. Star Song, 1993.
- MacDonald, George. *Lilith*. Johannesen, 1994.
- . *Phantastes: A Faerie Romance for Men and Women*. Johannesen, 1994.
- . *The Princess and Curdie*. Johannesen, 1993.
- . *The Princess and the Goblin*. Johannesen, 1993.
- McGillis, Roderick. "Childhood and Growth: George MacDonald and William Wordsworth." *Romanticism and Children's Literature in Nineteenth-Century England*. Ed. James Holt McGavran, U of Georgia P, 1991, 150-167.
- Prickett, Stephen. *Victorian Fantasy*. Baylor UP, 2005.
- Raeper, William. *George MacDonald*. Lion, 1987.
- Robb, David S. *God's Fiction: Symbolism and Allegory in the Works of George MacDonald*. Sunrise, 1989.
- Sadler, Glenn Edward. *An Expression of Character: The Letters of George MacDonald*. William B. Eerdmans, 1994.